

当事者部門受賞者

精神障害の当事者のみで運営する日本初の共同作業所を30年間運営。ピアスタッフの草分け

NPO法人 精神障害者回復者クラブすみれ会

【北海道札幌市】

1970年、北海道立精神衛生センターの社会復帰学級の卒業生4人が、当事者の会として「すみれ会」を立ち上げ。1986年、日本初の当事者のみで運営する「すみれ共同作業所」を創設し、1994年には2か所目の作業所を設立。2007年にNPO法人となり、現在は2つの地域活動支援センターとして活動している。共同作業所への補助金制度や、交通機関の障害者割引制度の実現にも貢献。当事者活動の原点ともいえる取り組みを、30年以上にわたり継続・発展させてきたことが高く評価された。

●居場所として

代表の宮岸真澄さんが初めて「すみれ会」を訪れたのは、28歳の頃。病院の帰りに立ち寄り、お昼をごちそうになった。居心地の良さが印象に残り、通い続けた。「働きたい人は働ける、辛くなったら逃げも隠れもできる場所」は今も変わらない。すみれ会に通う人たちの背景も様々だ。統合失調症を持つ人が多いが、うつ病や発達障害の人も増えているという。10年、15年と通う人もいる。宮岸さんは統合失調症の薬を継続して服用しているが、すみれ会に通い始めてからは一度も入院していない。

●現在の活動

すみれ会の活動は多様だ。段ボール加工などの作業や昼食準備、ミシンサークルでの小物作り、創立時から続く「すみれ会便り」の発行、自由なテーマで話す「語る会」、鍋を囲む「例会」、年に一度の「すみれ祭」。活動内容は「全体ミーティング」で案を出し合う。日々の活動に加え、行政との交渉や請願書の提出、学生への講義、実習生の受け入れなど、社会へのはたらきかけも積極的に行う。「僕たちにとって居心地のいい社会は、誰にとっても居心地がいいはず」という思いが、その原動力になっている。

●当事者のみで運営

運営にあたる職員は仲間の中から決めている。当事者だけで運営するという方針は創立時から続けてきた。だからこそ、いま、「ピアスタッフ」というカナ言葉で表されることに複雑な思いがある。「支援とは、たばこの火を貸したり、ジュースを分け合ったり、仲間うちから自然発生的に生まれてくるもの。そこで必要なのは、特別な資格や技法ではなく、相手に寄り添うことだ。ともに汗をかき、泥だらけになることを厭うてはいけないと思う」と宮岸さんは語る。

●すみれ会のこれから

現在、会員は100名弱。「こんな風に徒党を組んで活動しなくても、(当事者が)仕事や家庭を持てるような、寛容で自由な社会が来たらいいなと思う。それまでは、様々な担ぎ手がすみれ会を引き継いでいく」(宮岸さん)



「春先に咲くすみれの花は、ひとつでは目立たない。でも、たくさん咲くと、美しいし、力強い。それが、名前の由来です」と話す宮岸さん。



誰もが、好きなときに来て、好きなときに帰る。仕事をしたい人は作業をし、畳で一日のんびり過ごすのも自由。



会員の中には、今は入院している人や、家から出られない人も。その一人一人に、宮岸さんは手紙を書く。「元気か？」の思いをこめて。